

「新教育課程における社会科・地歴公民科中高一貫カリキュラムの研究」
(3年計画・第1年次)

筑波大学附属駒場中・高等学校 社会科

大野 新・小澤富士男・小林 汎
篠塚 明彦・丸浜 昭・宮崎 章
吉田 俊弘

「新教育課程における社会科・地歴公民科中高一貫カリキュラムの研究」

(3年計画・第1年次)

筑波大学附属駒場中・高等学校 社会科

大野 新・小澤富士男・小林 汎
篠塚 明彦・丸浜 昭・宮崎 章
吉田 俊弘

2003年度より高校においても新学習指導要領に基づく教育課程がスタートした。しかし、本校では、学校5日制を前提としつつ、2004年度より土曜日を総合的な学習の時間などに充てていくプランが検討されており、2004年度以降の社会科・地歴公民科の中高一貫カリキュラムについても再編が迫られている状態にある。そこで、新しい研究プロジェクト・テーマとして、表記のように「新教育課程における社会科・地歴公民科中高一貫カリキュラムの研究」(3年計画)を掲げ、中学から高校までの6か年でのカリキュラムをどのように編成するかを多様な視点から検討することにした。

第1年次の本年は、高校において世界史と地理の必修単位数が削減されたことを受け、地理分野は、中学と高校においてそれぞれどのようなカリキュラムを編成しうるのかを検討している。また、歴史については、3人の担当者がそれぞれの実践研究の過程で検討してきた成果を「考え方」として示し、より本格的なカリキュラム研究への序説として提示している。公民分野では、中学における経済・法(司法と人権)の学習のうえに立って、高校における「政治・経済」「倫理」がどのように構成されるべきかについて考察を加えている。

これらの研究は、いずれも担当者が自己の専門領域に引きつけて内容編成を検討している段階であり、地理と歴史の関係性、あるいは地歴系科目と公民系科目との相互の関わりなどについては言及されていない。これら社会系3分野間の連関をふまえたカリキュラム編成については、次年度以降、生徒の社会認識や市民的資質の形成についても吟味しながら検討を加えていくことにしたい。

キーワード 中高一貫 精選 焦点化 発達段階 個人と社会、科目間の連関

(1) 地理分野

1. 高等学校の地理学習

本年度(2003年)の高校1年生より、完全学校5日制にともなう新学習指導要領の下でのカリキュラムが実施された。従来、本校の地理学習は、高校1年生3単位(必修)、高校3年生2単位(選択)で組まれていたが、今年度より、高校1年生が2単位(必修)となり、1単位“減単”を余儀なくされている。なお、高校3年生の地理受講者は毎年50名ほど(02年度53名、03年度51名)であり、学年の3分の1弱の生徒が選択している。

2. 高3選択地理の学習内容

高3の選択地理の場合は、いわゆる文系大学受験者が、受験に必要としている関係もあり、高校地理の総まとめ的内容として、年間19テーマ(2時間連続)で授業を組んで

いる。その間、いわゆる実力テストである「特別考査」が年4回実施されている。

[2002、2003年度の場合]

- 1 オリエンテーション 実践編(1)
- 2 実践編(2) センター試験と二次試験
- 3 地図について(1)(地形図の読図、地図投影法など)
- 4 地図について(2)(地図の歴史、地域区分など)
(第一回 特別考査 5月中旬)
- 5 世界の自然(1)(大地形、小地形)
- 6 世界の自然(2)(気候、各地のくらし)
- 7 世界の自然(3)(植生、土壌、水)
(第二回 特別考査 6月下旬)
- 8 世界の環境問題
- 9 世界と日本の地域開発
- 10 民族と国家(民族とは、国家とは)
- 11 世界の民族問題(アフガン、パレスチナ他難民問題)

(第三回 特別考査 9月中旬)

- 12 人口と人口問題 (南北格差、国連の取り組み)
- 13 世界の食料問題 (飢えの原因、食料の流通)
- 14 世界の農牧業 (農業立地論、農業地域区分)
- 15 日本の農業と食料問題 (農政、産地、食料自給他)
- 16 資源・エネルギー問題
- 17 世界の工業と工業立地論

(第四回 特別考査 11月下旬)

- 18 村落と都市、都市問題
- 19 暮らしと文化 (余暇、観光、移民など)
- 20 世界の結びつき (交通・通信、貿易など)

(1~9は1学期、10~20は2学期)

以上の内容を自作プリント(資料プリントと演習問題)として準備し、授業を行っている。もちろん限られた時間内に行うわけであるから、各テーマについても総花的に扱うのではなく、焦点化して扱う。たとえば民族と国家の場合には、「民族とは何か」の定義を教科書記述の批判の例を含めて、きちんとおさえた上で、いくつかの典型事例を扱うという具合である。

3. 高1地理の学習内容

高校1年生の場合には2単位地理をどう組み立てるか模索中であるが、とりあえず今年度実施してみたものを報告する。

1. 地理学習事始め (地理学習とは? 「地球市民の地理と国家」 / (内藤正典) から) ②
2. [特論] 校外学習のために (菅平の自然、四阿山・根子岳登山、地形図を読む、ルートマップ作成) ④
3. 地形図に親しむ (地形図の変遷、軍事機密と地図、地名は物語る~世界と日本~) ④
4. 地図と地球(東京の東は? 地図投影法) ②
5. 民族と国家 (ドーデの「最後の授業」から、国家とは、民族とは、各地の民族紛争とその原因) ④
6. 戦後の世界の国家の変遷(作業課題「国連加盟国数の推移」、歴史の教科書に見る戦後世界) ③
7. 夏休みの課題発表会 (「環境地図作成」他) ④
8. 21世紀の世界の姿 (『世界がもし100人の村だったら』より、オリジナルバージョン作成の課題) ②
9. 同上(エネルギー資源、資源問題) ③
10. 同上(人権抑圧と紛争、「飢餓と難民」を読む、地雷問題、サタニックなもの) ③
11. アメリカ合衆国と現代世界 ⑧
 - (1) アメリカ合衆国とは
 - (2) 独立宣言とマイノリティ問題
 - (3) アメリカ社会と民主主義 (公民権運動から、

その後映画「ロングウォークホーム」鑑賞)

- (4) ネイティブアメリカンの過去・現在・未来

1~6までが1学期の授業内容、7~11までが2学期の授業内容である(○内の数字は実施時間数。1・2学期合計で39時間程度である)

3学期には中南アメリカ、アフリカまたは中東地域を扱う予定である。残念ながらアジア、ヨーロッパ地域をまとめて扱う時間はなさそうである。(小林 汎)

4. 中学校の地理学習

昨年度(2002年)から、中学校では、完全学校五日制にともなう新学習指導要領の下でのカリキュラムが実施されている。それまで、中学校では、1年生・2年生ともに2単位(π型)で、地理学習をおこなってきたが、新課程となり、中学校1年では1.5単位、2年では2単位で地理を学習するようになった。このため、中学校1年では前期(4~9月)に地理2単位、後期は1単位で時間割が組まれている。

新指導要領の地理的分野は内容も大きく改変された。これまで、日本の学習は地誌学習が中心だったが、新課程では、「調べ学習」(2~3の都道府県を選ぶ)と「世界からみた日本」の単元で学習することになった。一方世界の学習は、調べ学習で2~3の国、「世界からみた日本」の単元で世界全体の傾向をつかませるにとどまっている。これでは体系的な世界認識を構築することは困難である。

本校では、旧課程からテーマで地誌学習をおこなってきており、新課程でも踏襲している。また、総合学習の内容が地理学習(社会科学習)と強く関連しており、総合学習を地理学習の補完的役割を果たすものとして重視している。

5. 中1地理の学習内容

中1地理は、これまで2単位で実施していた内容を1.5単位で実施するため、内容の精選が必要となった。昨年度から試行的に実施している年間の学習内容を挙げてみる。(○内数字は時間数)

1. 空間や距離の感覚をつかむ (教室やグラウンド、水田の広さを測る) ③
2. 地形図の学習 (5月の校外学習に合わせて地形図判読や記号などの学習を行う) ⑤
3. 日本の概観 (国境問題を考える) ②
4. 沖縄から日本を考える (自然、歴史、基地、経済、環境などの問題をとらえる) ⑥

5. 環境地図発表会（旭川で開催されている「身のまわりの環境地図コンクール」に応募するため夏の課題で環境地図作成に取り組み、クラスで発表する。優秀な作品を旭川に送る） ⑤
6. 水俣から日本を考える（水俣病を取り上げ、日本の環境問題を考える） ③
7. 広島から日本を考える（原爆を取り上げ、科学者のあり方や原爆と平和について考える） ②
8. 阪神淡路大震災から日本を考える（地震をとりあげ、被害や復興についてとらえる） ②
9. 豊田から日本を考える（豊田市をとりあげ、工業や企業城下町について考える） ②
10. 青森から日本を考える（六ヶ所村をとりあげ、原子力政策について考える） ②
11. 北海道から日本を考える（アイヌの人々をとりあげ、日本の民族問題を考える） ②
12. 東京の地域研究にむけて（総合学習の時間も取り込み、中2で実施する東京の地域学習の準備を進める。具体的には東京の環境問題を取り上げて、フィールドワークにむけての準備の必要性を意識させる） ⑥
このほか、学期末には試験返し等の時間があるので、総計は44時間となった（2002年度）。

日本の学習方法として、7地方区分にもとづく地誌学習の有効性を否定するものではないが、時間数の少ない中で、テーマをしぼって1つの課題についてじっくりと展開する方が生徒の社会認識が深まると考えているため、事例学習で実施している。

いわゆる「調べ学習」については、身近な地域および都道府県調べを合わせて、総合学習として設定している「東京の地域研究」で扱っている。これは、中学2年次の5月、2日間にわたって東京都内および神奈川の一部をフィールドとして調査活動を行うもので、すでに本校では長年続く課外活動となっている。実際に校外に出かけることができるため、準備段階を含めて、学習指導要領がねらっている調べ学習の要素をかなり満たしていると考えている。そのため地理の時間も一部使って、フィールドワークのノウハウや準備に必要な下調べのやり方について授業を行っている。

6. 中2地理の学習内容

中2地理の学習内容はこれまでと大きく変わっていない。1学期初頭は前述した「東京の地域研究」の準備に使い、後半から世界の学習をはじめます。

1. 東京の地域研究にむけて（フィールドワークにむけてのガイダンス、作業、面接などを行う） ⑩

2. 世界学習の基礎（地図図法や時差、経緯度などをあつかう） ③
3. 朝鮮半島の2つの国（2つの国の概要、歴史的背景、現状などを扱う） ④
4. 中国（歴史、香港、台湾、人口、農業、工業、環境問題などをあつかう） ⑧
5. 西アジア（歴史、イスラーム、石油資源、イラク戦争などをあつかう） ⑦
6. 青森（中3の校外学習にむけてオリエンテーション） ②
7. アメリカ合衆国（民族、農業、工業、多国籍企業などをあつかう） ⑧
8. ヨーロッパ（民族、EU、おもな国の地誌をあつかう） ⑥
9. アフリカ（歴史、民族、援助をあつかう） ②
10. 南アジア（歴史、農村、援助をあつかう） ②
11. 地理学習のまとめ ②

世界の学習では、アジアおよび先進国を中心に上げている。今年度は、イラク戦争もあり、近年イスラーム世界への理解が求められていることから、西アジアを多くとりあげた。アメリカの学習はそれに続くものであり、生徒の現在生活している環境とつながっている部分の多い内容となっている。

中学校地理的分野全体としては、まず減少した時間内で、必要と思われる内容をどのように組みこむかという精選の問題がある。中学校1年の後半はとくに週1時間となり、学習の継続がなかなか難しい。1つのテーマの内容を縮小する試みも行ったが、かえって理解を妨げてしまった面があった。

また、世界地誌学習の展開としても課題が残る。扱う地域が先進国にかたより、途上国が少ない。初めて世界の学習を本格的に行う中学生に対して、途上国への理解が不十分なまま終えてしまっている。

7. 地理分野の課題

以上、地理分野の現状を報告した。中高一貫カリキュラムの構築にむけて課題となる部分をあげると、まず、現状における中学と高校の学習内容の重なりを整理する必要がある。たとえば地形図の学習やアメリカの学習内容に重なりがみられる。しかし、経験的に、高等学校1年段階で地形図の内容をたずねると、ほとんどの生徒が忘れてしまっている（定着率が低いといわざるを得ない）。その点で、重要なことは反復学習もある程度はやむを得ないと思われる。大部分の生徒は高校入試がないために、中学校の学習内容をまとめる機会がなく、そのような状

況を生んでいるものと考えられる。

また世界学習における地域の取り上げ方も工夫する必要がある。たとえば先進国の場合、中学ではヨーロッパ、高校ではアメリカといった工夫が必要かもしれない。また、途上国はおもに高校で扱う方が理解が深まると思われる。これは、南北問題の理解に政治・経済の知識が不可欠なことで、さまざまな概念を抽象化してとらえることができるようになるのが、中学から高校にかけての段階であると思われるからである。

小林が述べたように、高校では2単位となり、大幅な学習内容の精選が求められている。このため、中学校の内容と合わせた学習内容の検討が急務となっていることを指摘しておきたい。(大野 新)

(2) 歴史分野

1.はじめに

中学1年で社会(歴史的分野)週2時間、中学2年で社会(歴史的分野)週2時間、高校1年で「世界史A」2単位、高校2年で「日本史A」2単位というのが、新学習指導要領のもとでの、本校で中高6年間を過ごす生徒の歴史関係の授業時間数である。これに高校3年で文系に進路をとると、「世界史概論」(世界史B相当)3単位と「日本史概論」(日本史B相当)3単位を、最大でとることも可能となる。さらに、中学3年のテーマ学習や高校2年のゼミナールという総合的な学習の中で、歴史が好きな生徒は歴史の教員のもとで少人数のクラスに属する可能性もあるが、中高のカリキュラムづくりの中では、この少人数のクラスについては除外して考えるべきだろう。

全体の授業時間数が減少して通史的に全範囲を行うことはむずかしいが、その悪条件のなかでも、本校の歴史に関しては、うまくカリキュラムを組めば、以前よりやりやすくなった面もある。旧課程では、中1、中2で歴史を学んだ生徒は、歴史学習に関しては2年間のブランクの後、高2で「世界史B」3単位、高3で「日本史A」2単位だったからである。

担任の関係、持ち時数の関係などから、中学歴史と高校日本史の担当者の決まったパターンはなく、そのときどきで変わることはやむをえないし、担当教員の個性や独自のやり方、あるいは創意工夫の余地を残していたいので、むずかしい点はあるものの、中1、中2、高1、高2でのそれぞれの生徒の理解力や発展段階に応じた大枠を設定することが、この3年間の研究プロジェクトでの課題となっている。

本年度は、歴史担当の3名の教員が、これまでの経験や蓄積を踏まえて、中学と高校でどのような歴史教育をすべきか、また社会科教育全体の中でどう歴史教育を位置づけるか、検討すべき課題と現状の問題点などを率直に出し合い、中高一貫のどのような歴史教育のカリキュラムにまとめていくかの議論のスタートとしたい。

2.考え方 その1

社会科全体の中で、地理や公民分野は現代の問題を中心に学習している。その際に歴史的に少しさかのぼって物事を見ることはよくあるだろう。一方、世界史A、日本史Aのそれぞれ2単位という減少した時間数の中では、古い方から順に学習していったらどういって近現代に到達しないし、やはり近現代史が重要という意識から、最近はこちらも近現代からスタートするようになってきた。我々もその重要性を強調してきた。結果として、社会科で扱うことが近現代に集中している。しかし、高3で世界史、日本史を選択しない限り、前近代のことをまったく学ばないでいいのか、という思いは残る。例えばドイツなどでの歴史教育が7th~12thの学年の中で、明確に扱う時代を分けていることは有名なことである。日本のように、小学校、中学校、高等学校でくりかえし古代から歴史の学習をするような教科書となっているのは、世界的にみて、一般的ではないのかもしれない。聖徳太子や豊臣秀吉は何度も登場するのである。しかし、中1、中2は前近代、高1、高2で近現代と時代を明確にわけカリキュラムでいいのかは検討を要するだろう。例えば、中1の平安、鎌倉時代で荘園公領制を中学生レベルの内容に易しくかみ砕いて扱った期(49期、55期)もあったが、生徒の感想はやはり「むずかしい」「面白くない」というものも見受けられた。しかし現行の中学教科書のような荘園の扱いは最近の研究成果とはかけ離れてしまっているともいえる。週1.5時間に減ってしまった今年(57期中1)、荘園関係はすべて省略し、そのかわりに「一遍上人絵伝」から中世の社会を考えるという教材をつかったが、そのほうがはるかに生徒の関心やレベルにあっていた。

新学習指導要領でははっきりとなくなってしまった世界史関係の内容を中学でどうするかも課題だろう。4大文明やギリシャ・ローマなどは、旧課程では中学生になったばかりの1年生の最初に、歴史に興味を持たせる教材としては、非常に有効だった経験がある。高1での世界史が近代からはじまるなら、かつてのような大筋としての古代・中世の世界史は中学で少しは学習しておいたほうがよいように思える。2002年度(55期中2)では、サ

サッカーの世界カップが開催された年でもあったので、体育科のある教員とタイアップしてワールドカップ参加国の歴史を各自に調べさせ、教室で発表し、冊子として印刷した。中学1～2年の頃は、講義をただ聞いているより、自分たちで発表する形式は有効であった。

これまで2年間、中学3年の夏や秋に集中講座として行っていた佐倉の国立歴史民俗博物館の見学は、授業のある中1、中2の中に位置づけたほうがうまくいくだろう。今年の57期は中1の3学期期末試験後に佐倉での博物館見学・調査を行い、「一遍上人絵伝」の学習で始めたことを、全員に、実際に自分の興味のある時代やことからやらせてみるつもりである。これがうまくいくようなら、中学の歴史学習の中に位置づけたい。歴博の第1～第5展示室ごとのワークシートに基づいて、希望の展示室を注意深く観察する午前の作業を<基礎編>と位置づけ、自分の関心あるテーマについて自由に探究させる作業を午後に<応用編>として位置づければ、やや急がしいかもしれないが、充実した博物館学習となるかもしれない(加藤公明「子どもの探究心を育てる博物館学習」『歴博ブックレット』2000年参照)。中学2年でクラス替えをした後、新しいクラスで、似た探究テーマの生徒同士で班をつくらせ、自己紹介的に発表授業としたい。

中学2年では、戦国時代以降、近現代史を中心に、教員からの講義と、ときおり史料をじっくりと読み込ませたり、違う立場の史料を読ませて議論をしたりという作業的な授業を混ぜながら、やはり1945年までは扱っておきたい。戦後史は高校に残しておくので、いいのではないか。

高校2年の日本史Aでは、高校1年の世界史Aとのつながりを考える必要があるだろう。特に20世紀の歴史では、日本史と世界史は密接なつながりがある。カリキュラム面での検討が必須である。そして可能ならば、1学期ぐらいは前近代の重要テーマをいくつか扱ってはどうか。全体の流れを場合によっては作業などでとらえさせながら、いくつかの歴史学上の論点を紹介するのはどうだろうか。網野善彦さんの論点とか、天皇論とかは全員に学習させたいテーマである。その場合、高3の日本史概論(日本史B)との棲み分けを明確にしておく必要がある。

日本での歴史教育でもっと参考にしてもよいと思われるのが、アメリカ・イギリスなど欧米で発達しているOnline上での講義や史料、ホームページ、そして分厚い教科書かもしれない。生徒が考えるべき課題や質問、参考に読むべき文献や史料を非常に丁寧に準備してある。日本でもこうしたものを用意すべき時期にきているので

はないだろうか。

今回、イギリスの教育を調べていて、衝撃を受けたことがある。GCSEという中学段階での修了試験で、歴史は選択科目なので一部の希望者のみが受験するわけだが、そのカリキュラム構成や、学習の達成度を測るテスト問題のユニークさは日本の歴史教育も大いに学ぶ価値がある内容を持っている。19世紀後半から現代までを対象とし、アウトラインの学習(A)、深化させる学習(B)、学習課題(C)という名の論文作成で構成されている。以下にその例を示しておく。

Section A: Outline studies

- A 1 The Road to War: Europe, 1870—1914
- A 2 Nationalism and Independence in India, c1900—49
- A 3 The Emergence of Modern China, 1911—76
- A 4 The Rise and Fall of the Communist State: The Soviet Union, 1928—91
- A 5 A Divided Union? The USA, 1941—80
- A 6 Superpower Relations, 1945—90
- A 7 Conflict and the Quest for Peace in the Middle East, 1948—95

Section B: Depth studies

- B 1 The Russian Revolution, c1910—24
- B 2 The War to End Wars, 1914—19
- B 3 Depression and the New Deal, 1914—19
- B 4 Nazi Germany, c1930—39
- B 5 The World at War, 1938—45
- B 6 The End of Apartheid in South Africa, 1982—94
- B 7 Conflict in Vietnam, c1963—75

Section C: Coursework

British History

- C 1 Votes for Women, c1900—28
- C 2 The Changing Role and Status of Women since, 1945
- C 3 Social and Welfare Reforms in Liberal Britain, 1905—14
- C 4 The Rise of the Labour Party, c1890—24
- C 5 The General Strike
- C 6 The Home Front, 1914—18
- C 7 Britain in the Age of Total War, 1939—45
- C 8 Two Nations? British Society in the 1940s
- C 9 The Creation of the Welfare State: British Society in the 1940s
- C 10 Finding a Role? Britain and Europe since, 1945

- C11 Decolonisation—from Empire to Commonwealth
 C12 Britain and Overseas Conflict—The Suez
 Crisis and the Falklands War
 C13 Northern Ireland since c1960

それぞれから2つずつを選んで学習を進め、GCSEで年1回その達成度を調べるテストが行われるというわけである。香港で英国流の歴史の学習を行っている生徒がそのやり方を次のように書いている。

10月13日：今は上にも書いたように中国の近代史をやっています。孫文、馮儀、蔣介石、袁世凱の功績を詳しく習っています。宿題にはこの歴史上の人物のことを自分なりに分析してエッセイにいきます。あとはどの人物がBest Leaderなのかをエッセイにしたりします。こうしているんなアングルから分析してエッセイを書き綴っていくことで、その時代に出てくるキーポイントや特殊な名前などを自然に覚えていくみたいです。この辺が日本のテスト前に暗記していくやり方と大きく違う点だと思います。

(<http://members.at.infoseek.co.jp/rockfreak/year10new.htm>)

英国の歴史教育について、別の人は次のようにその特徴を書いている。

イギリスでは、史実をめぐって、自分の意見を言ったり、クラスで討議したりするのも授業の一部です。小学生のときは古代史中心、そして中学に入ると、近代史に焦点が絞られるようです。しかし、歴史は中等教育修了試験であるGCSEの必須科目ではないので、多くの学生は14歳で歴史の勉強を終えます。東洋など外国の歴史なんて、とてもタッチする時間はありません。深く勉強する分、カバーする範囲が少なくなるのは仕方がないようです。

(<http://www.geocities.co.jp/SilkRoad-Forest/8101/bnprima05.html>)

自分の将来が中学修了段階で決まる英国流教育の是非の議論はあるが、GCSEで良い成績を取るためにどんな歴史の学習するかは、インターネット上で教材や史料、テスト問題、その評価基準など詳細に見ることができる。詳しい報告は後日とせざるをえないが、十分検討に値する内容であることは間違いない。

ここからヒントを得ながら、日本に即した形での中高一貫の歴史教育の新しいカリキュラム研究を進めることができるように感じている。

(文責 宮崎)

3. 考え方 その2

これまでの実践をふり返って

中学歴史学習

これまでは、高校での歴史学習は2年で世界史B、3年で日本史Aと、中学時代と時間的に離れており、現実的に、中高を関連させた歴史学習にあまり取り組むことができなかった。それは、いいかえれば、中学は中学としてある程度のまとまりをもたせる、完結をはかるということになる。基本的には古代から現代まで、プリントを作成して、教科書よりは深く学ぶ授業をしてきた。その際、つぎのような点に留意してきた。

- * たんなる事実の羅列ではなく、事実の関わりを中心に、それぞれの時代の特徴をつかむようにする。それが、前の時代との違い、歴史の発展をとらえることにつながる。
- * 前近代ではアジア、近現代ではさらに世界との関わりを重視して日本をとらえる。
- * 資料とともに、お話教材的なものをかなり取り入れる。岩波ジュニア新書を併用したこともある。
- * 課題図書を読ませてレポートさせたり、テーマを設定して歴史新聞を作成することも試みた。

こうした中で、生徒は基本的にはよく学び、ただ覚えるだけではなく、考えて理解する学習をしてきたといえる。期末試験などの結果でも、手応えを感じてきた。

しかし、高校とつながった中学での歴史学習としてふり返ると、さらに検討すべきことを強く感じている。高校での社会認識の土台となるものは、知識、思考力、理解力、さらに興味・関心などが複合的に絡むものになるといえよう。こうした点から中学の歴史学習を見直すと、やや深く多くのことを取りあげることが、必ずしもその後の社会認識の土台にはなっていないと思える。知識は重要だが、多くのことを取りあげるのでなく、むしろ絞られたことがらをじっくりと学ぶことの方が、その後定着する知識になるのかもしれない。それは、自ら学ぶことのおもしろさを感じる機会をもっとつくる必要があるという課題にもつながる。

また、具体的な課題として、いわゆる「平和学習」をもうすこししっかり位置づけたい。戦後60年になろうとしている現在でも、戦争認識が社会認識の一つの大きな土台となっているのが日本の現状である。本校では、他の社会科の科目とあわせて、戦争と平和の問題や現代の課題にふれる機会はけして少なくないが、じっくりとした学習にならず、やや上滑りになっている面があるように思える。

高校の歴史学習が高1世界史A、高2日本史Aとなるにあたり、こうした中学の歴史学習の見直しに積極的に取り組み、中高の関わりをふまえたカリキュラムを進める機会としたい。

高校日本史

高校2、3年生は、自分なりの社会観を形成していく時期であろう。中学1、2年のときよりは、教員の示す授業内容をそのままには受けとめなくなる。基本的に、近現代史を取りあげてきた。戦後50年をこえた中で、ここ数年は戦後史も重視している。ただ、高校3年という時期は、興味関心を高めて学習意欲を持って取り組む上では困難があったことは否めない。

また、世界史と日本史を結びつけて取りあげる検討も始めてきた。世界史が3単位から2単位へ減少する中で、両者に関わらせた学習がいつそう重要となると思える。

新しく、どう構想していくか

全体として

これまでのように中学1、2年でいちおう原始・古代から第二次大戦あたりまで学び、1年おいて、高校の世界史A・日本史Aで、近現代中心ではあっても重なる内容を学ぶという事態は避けたい。1年を間にはさんだ4年間をとおしてどのような歴史学習をするか、という検討をする。

まず中学で前近代、高校で近現代と、あつかう学習内容を時期によってわけることが考えられる。一般的に、中学生の方が何にでも関心を示し、高校になると関心が絞られていく状況がある。この点から、現代から遠い時代や遠い世界は、高校生よりも中学生の方が興味を持って学ぶことができるという面もある。

しかし、中高それぞれの発達段階で受けとめられること、理解できることに大きな違いがあり、ただ時代をわけて重ならないようにすることだけではすまないことを考慮する必要がある。戦争と平和の学習なども中学生にさせたいし、研究史などもふまえた歴史の複雑さ・おもしろさや、古い時代をとらえることでより現代を深くとらえられるようになるのは高校段階である。

また、高1の2単位の世界史Aでは、これまでの世界史の内容をあつかうことはできない。これまで以上に、高校世界史と中学歴史の関わりを検討する必要がある。高校でも、世界と関わらせた日本史をとらえることが求められている。「世界と関わらない日本史」、「日本の出てこない世界史」にならないようにしたい。

こうした点をふまえて、中学歴史、高校日本史の学習

課題について、何点かメモ風に記しておく。

中学歴史

*前近代史学習に比較的重点をおく。

*ヨーロッパ、西アジア、東アジアなどの地域の前近代の歴史をあつかう。

*中2で、戦争と平和の学習に一定の時間をとる。

*重点的に学習をするところと、教科書的なまとめ、年表づくり、読み物などで通史的な補いをおこなうところをもうける、などの工夫をする。

*生徒の調べ学習など多様な学習の在り方を取り入れる。

高校日本史A

*歴史学習のまとめとして、現代史学習を一定時間とおこなう。高校2年にふさわしい資料などをあつかうようにする。

*高1の世界史Aをふまえ、日本の視点から世界をとらえなおしたり、日本を世界に位置づける学習を重点的におこなう。近現代に限らずテーマを検討する。
(文責 丸浜)

4. 考え方 その3

新しいカリキュラムの導入に伴って、本校における世界史は、現行の3単位の「世界史B」から、2単位の「世界史A」と移行することとなった。また学年も2年生から1年生へと移行した。「世界史A」への移行に伴う最大の問題点は単位数の減少ということになる。今までの3単位の授業においても通史的に全地域世界、全時代を取り上げることは極めて困難な状況にある。そのため、これまでは15世紀末、すなわち大航海時代から世界史の授業をはじめ、20世紀半ばころまでを扱うという取り上げ方をしてきた。なお、20世紀後半以降は日本史の授業の中に世界史的視点も取り入れて扱い、前近代については3年生の選択世界史のなかで取り上げるという扱い方をしてきた。1単位の減少ということになると当然これまでのような取扱は困難となる。1単位減少した分を削減するとすると二つの方向性が考えられる。一つには取り扱う時代を、現行よりもより現代に近づける方法。つまり、授業の始まりを17・18世紀あたりにおくというもの。もう一つは取り上げる地域を削減するという方法。ヨーロッパ・イスラーム・東アジアといったなかからある部分を大幅に削減するというものである。結論から述べると、今回の単位数削減にあたっては、前者の方法で対応することがより望ましいであろうと考えている。現在においても、十分に取り上げることでできない地域世界もある。その上で、さらに取扱の薄くなる地域世界が

生じることは避けたい。特に現代の世界を考える上では、多様な価値観・多様な世界を学ぶということは益々重要となっている。そのためにも地域世界の扱いを今以上に減少させることは避ける必要がある。17・18世紀頃を起点とすると、大航海時代・ルネサンス・宗教改革などを取り上げることはなくなる。これらの項目を決して軽視するつもりは無いが、現代世界で重視されるべき「民主主義」の発展ということからは、市民革命以降を取り上げることである程度理解することはできると考えている。また、そもそも世界史Aは近現代をより重視することが求められる科目でもあるのでその点からも17・18世紀以降を取り上げるという方法でよいのではないだろうか。その上で、具体的にどのような項目を取り上げるのかということを考えてみたい。

世界史という科目は本来、今の世界・未来の世界を考えるためのものであると考える。これからの平和な世界を築くためには、様々な価値観・世界観を持つ人々が共存できるようになることが必要である。歴史的にはこれまでの世界には様々な価値観・世界観を持つ人々が共存してきた例がいくつもある。そのようなことやそもそも世界には様々な価値観・世界観が存在してきたのであるということの世界史の授業を通して、生徒に考えてもらいたい。そこで、ヨーロッパ、イスラーム、東アジアという地域世界を中心に上げて授業を展開することを考えている。ヨーロッパの部分では、近代国民国家の発展や民主主義の発展を中心に学び、イスラームではオスマン帝国を中心に、イスラーム的価値観やいわばイスラーム的民主主義ともいえる概念を学ぶ。そして、東アジアにおいては中国を中心とした朝貢貿易体制といった独自の国際関係、人と人のむすびつきのあり方などを学ぶ。そうした上で、それらの地域世界がどのように複雑に結びつき、世界の一体化がなされていくのかということなどを学んでいくことを考えている。こうしたことを通して、現在世界を覆っているとも言えるヨーロッパ的価値観を相対化し、これからの世界を考える材料となればと考える。

しかし、このような取り上げ方をした場合にも、時間数を考えると当然20世紀中頃までを扱うのが限界という状態であり、20世紀後半以降は日本史の授業のなかで取り上げていくことが求められる。さらには、20世紀の終わりごろに関しては政治経済分野においても取り上げられることが求められる。一方、前近代については3年生の選択科目「世界史概論」で取り上げるとしても、それは一部の生徒を対象としたものとなってしまう。前近代の世界を全く学ぶことなく歴史の授業を終えてしまう

生徒が少なからず存在するということがやはり疑問を感じる。高校の世界史でこの部分を扱うことができないとなると、それは中学の歴史で取り上げるように考える必要がある。当然中学の歴史も限られた時間の中で世界を十分に扱うことは困難である。また、現行の教科書においては世界に関わる部分が大幅に欠落していることも承知している。そのような状況を踏まえて、中学でどのように世界を取り上げるか。中学生の発達段階等も考慮した場合に、複雑な世界の関わり合いといったことは理解が困難となることが予測される。幸いにも、前近代の部分においては、世界の一体化を伴うような複雑な関わり合いは比較的少ないといえる。従って、中学生が学ぶ世界の歴史としては、前近代は適しているとも言えるだろう。取り上げ方としては、世界が一体化する以前の諸地域世界の特徴的な部分を理解できればよいのではないだろうか。あまり、細部に分け入り、専門的な用語などにとらわれることなく、そこに暮らす人々の様子や地域の様子が理解できるという程度でもよいのではないだろうか。もちろん、限られた時間の中で、世界の全ての地域を扱うことは困難であろうから、幾つかの地域を選択的に学ぶことも考えられる。そして、高校の世界史につながるような観点から、世界には多様な人びとが多様な暮らしを営み、様々な文化が形成されてきたことが理解できるようになることが望ましいと考える。

以上、世界史学習の観点を中心に、中学歴史や日本史との連関について、現在考えていることの概略をまとめた。なお、中学歴史や日本史との連関のほかにも、同じく高校1年で学ぶ、地理との連関が全く考慮されていない。歴史分野内部の連関と同時に、特に世界史の場合には地理分野との強い連関がある。従って、歴史分野内部の連関と同時に地理分野との連関・連携をどのように進めるのかということをおある程度平行して検討する必要がある。

(文責 篠塚)

(3) 公民分野

1. 中3公民分野

「今」を生きるわれわれにとって、「現代社会」とは、まさにわれわれの意識そのものであり、われわれは絶えず時代現象として息づき、その時代の政治的及び経済的影響下に身を置きながら、時に政治的アイロニーに、時に経済的アイロニーに、流転、変転を繰り返す存在である。

どんなに頑張ってみても、われわれの思考が今日より

先にいくことはできないし、まして先を予見することなど、複雑に変化する現代社会にあって、放棄した方が良いぐらいのものである。例えば、ナチスの台頭や中国文化革命など、「次の現代」を創出していくための政治的行動や政治的イニシアティブが、無謀な試みにつながり、歴史的悲劇を生み出したのをわれわれは良く知っている。例えば、外国為替相場における円の推移などには、さまざまな変動要因が存在し、その要因を全て組み入れた為替変動予想ソフトなど現実に作り上げたとしても、予期出来ぬ出来事にあっさりとはひっくり返されることとなることを良く知っている。2001.9.11に忘れられたアフガンの地に拠点を持つ組織から、西欧的世界原理への報復が行われるなどとは誰も予想しえなかったし、その後今日のような展開を誰も想像しえなかつただろう。確かあの日までアメリカはわが世の春を楽しんでいたはずであり、あの日まで堅調であったドルの相場が、現在の数字まで下落するとは、当のアメリカ自身も考えてもみなかつただろう。そのことを考えると、「次の現代」を展望し、「次の現代」への意味づけや政治的イニシアティブがいかにか困難でいかに喜劇的なことであるのか、改めて言を待つまでもない。政治的今日を生きたとしても、経済的今日を生きたとしても、その続きとしての明日がどうなるのか、誰にとっても予想し難いことなのである。

しかもその一方で、政治的な明日や経済的な明日は、今日後に直ぐにやって来る。「現代社会」は絶えず現代を更新しながら、次の時代へとつながる時代現象として存在する。「現代社会」は「今」という直中に誕生し、育まれていく歴史現象でもある。

だが、以下のことは現代社会を学ぶ上で有効な手段であると考えられる。今日を生み出した歴史的な事実を前提に、絶えず現代を検証しながら、今日はどこからやってきたのかを考え、現代に関心を持ち、現代を批判し、現代を捉えていくことは、「政治的明日」や「経済的明日」に間違いなくつながっていくということである。われわれは絶えず歴史的連続性の中で現代を生きる訳であり、その意味で歴史的存在であり続ける。「何」が起きて来たのかあるいは「何」が起きているのかを、伶俐に検証し、伶俐に現代的状況を確認することで、少しでも政治的・経済的明日を捕まえていくことができるのではないかと考える。その意味で、地理的分野や歴史的分野の学習を終了した後に展開される中3公民分野は、まさに、「現代社会」をどのようにして捉え、考えていくのかの試金石となる。公民分野の学習は、地理分野や歴史分野の発展的な段階として、現代社会の意味を探り、社会と自分達との関わりを考える授業内容によって構成される。

本校中3公民分野では、「現代社会」とは何かその意味を問い直しながら、現代社会を意識化し、現代社会に生きる個人として「自分のあり方」を見つめるところから、「個人と社会」を「核」に、経済的学習や政治的学習を進めて行こうと考えている。そのために、「簡単な経済的な仕組み」や「経済生活に必要な道具や手段」、「経済的な仕組みの発達とその展開」などから、人と社会との関わりを捉え直すことで、「現代社会」を考えるための入り口とする。また政治的な分野から眺めれば、個人と個人との争いや調停を、「司法」という社会の枠組みの中で捉え直すことで、「個人と社会」の関わりを深く認識させ、「個人と社会」の関係性を考えさせることで、「現代社会」を考える入り口とする。

ともすれば個人的な関係にのみ流れ易い時代状況の中で、ともすれば個人的な関係にのみ関心が収束し易い最近の「ものの見方」の中で、生徒と共に「現代」を問い、生徒と共に「現代」を考え、生徒と共に「現代」に答えていくことで、「個人と社会」ひいては「現代社会と自分達の関わり」についての関心が喚起されると判断する。

自由化・個人化・国際化などを基軸に、多様化し複雑化する「現代社会」をどのように捉え直し、授業の中で展開していくのかは、難しい課題とはなっているが、中3公民分野においては、新しい本校のカリキュラムへの対応も兼ねながら、「個人と社会」を核にして、概ね以下のカリキュラム構成とその内容の展開を通して、高校2年の「政治・経済」につなげていきたいと考えている。なお、中学3年生は12月頃、「総合的な学習の時間①-司法体験プログラム-」としての裁判傍聴と検察庁見学を行うため、4月から10月までを経済的学習期間とし、11月から「総合的な学習の時間①-司法体験プログラム-」に関わる「司法学習」を出発点として、11月から3月までを、概ね政治的学習期間として、人権問題を主たるテーマに授業を実施する。以下約80時間に渡る年間授業内容を主な単元ごとに提示する。

4月から10月まで（経済的学習）

1. 資本主義経済の誕生
2. 資本主義の仕組みとその発達
3. 経済三主体とその役割
4. 景気変動と資本主義経済
5. 日本経済の発展とその課題
6. 国際経済の展開と国際主義

11月から3月まで（政治的学習）

1. 司法とは（法による権利の保全と民主主義社会を支えていく司法の役割をテーマにして、政治的学習の導入とする）

2. 「人権概念」発達の歴史
3. 日本国憲法に見る権利の保障
4. 現代社会と人権問題の課題

以上の主なテーマより中3公民分野の学習内容とする。

2. 高2政治・経済

上記中3「公民」の内容を受け、中高6カ年の一貫性をも考慮しながら、「社会と個人」の関係から、より自覚的に現代社会への関心を深めさせ、現代社会が抱える課題や現代国際関係に関わる課題をテーマに、授業を展開する。

高2「政治・経済」にあっても、「現代社会」に生きるわれわれにとって課せられる課題は、中3公民分野と同様のものであるが、生徒の発達や高3で行う「倫理」との関係から、中3公民分野で扱った教材内容を、より発展させ、より現実との強い関わりを持つテーマを通して授業内容を設定していく。例えば一例を挙げれば、グローバリズムの深化が国際社会や国際経済などにどのような影響を与え、それが日本のこれからのあり方をどのように規定するのか。例えば、急速に進む少子高齢化によって、現実に不足することになるマンパワーをどのように補い、遍在する富をどのようにして再分配することで、活力ある社会を創建するのか。例を挙げれば山積する上述したような問題と、授業の中で生徒は直面することとなる。現実との深い関係性を自覚させ、意識させることで、とかく抽象的な内容に陥り易い教材テーマを、現実的な解決性を提示することで、自分達の問題として考えさせ解決させていければと考える。その意味で言えば、高2「政治経済」は中3「公民分野」と比較して、より課題解決的な授業となる。

つまり、われわれが抱える問題に対して、より主体的に関わり、解決しなければならない現実的問題を生み出している原因を探り、分析批判をし、個人と社会の関わりの中から、直面する「現代」を捉え直すことで、多岐に渡る問題を積極的に解決していく姿勢が要求されると言える。

以上のような積極的な課題解決への姿勢を要求しながら、概ね以下の主たるテーマより、高2「政治・経済」を行う。

- 1 戦後政治の展開
- 2 現代国家と民主政治
- 3 現代政治の諸課題
- 4 財政とわれわれの暮らし
- 5 金融の果たす役割
- 6 豊かさの追求とは

- 7 国際政治と国際社会
- 8 国際経済とグローバリズムの深化

(文責 小澤)

3. 高3倫理

高校3年の「倫理」は、中学3年の公民分野、高校2年の「政治・経済」のあとに位置付けられる。したがって、倫理のカリキュラムは、高校2年の政治・経済の学習成果に立って、個人と社会との関係を社会に生起する諸課題を通して探究させるとともに、現代の諸課題から見えてくる「価値」や「規範」の問題を学習の中心におく予定である。

本校での年間行事計画を配慮すると、高校3年生の倫理は2単位であり、実質的には38時間程度で構成される。前段の1～23時間は、「現代の課題と倫理」というテーマをおいた。ここでは、最初に「個人と国家－自由と権力」を取り上げることとした。最初にこのテーマをおいたのは、中3公民、高2「政治・経済」との関連性を重視しているからであり、内容はシステム論としてよりも政治思想的な観点から取り上げてみたい。続いて取り上げる「生命倫理」「環境倫理」は、現代の課題として焦点の一つにあげられており、自然科学、経済学、法学などの研究成果に立って、自己決定権や社会における合意形成などとの関わりの中から探究していくこととする。「現代社会の特質」は、情報化と少子高齢化を中心に取り上げる。この分野では、生徒による具体的な作業なども適宜織り込むことができるはずである。最後に「異文化理解」について取り上げ、現代社会における共生の課題を探究していきたい。

後段の24～38時間は「現代に生きる倫理」というテーマを設定した。前段がより具体的なテーマから現代倫理の課題に迫っていくのに対し、後段は、抽象的な思考を要するテーマ設定となる。ここでは、最初に「人間の自覚」から入り、先哲の思想や宗教を取り上げることとする。前時の「異文化理解」の学習をさらに深め、発展させるという点でも意義があるものと思われる。「現代に生きる倫理」は、近現代の西洋思想や東洋の思想を取り上げ、その受容のあり方を考えてみたい。最後に、これらの学習の成果に立って、「青年期」を学び、「現代」を生きる青年の倫理学習のまとめとしたい。

第1編 「現代の課題と倫理」

第1章 個人と国家－自由と権力

- 1 民主社会の形成(1)－自由とは何か
- 2 民主社会の形成(2)－権力とは何か

- 3 民主社会の形成（3）－社会契約説の考え方
- 4 民主社会の形成（4）－個人と社会
- 5 民主社会の形成（5）－デモクラシーの考え方
- ※ 本単元は、政治・経済の授業で一通り学んだ領域であるが、倫理学習では近代民主政治の考え方を社会思想の観点から捉えなおし、思索を深める。自由や権力の問題を、ロック、ルソーらの社会契約説、ミスや功利主義、社会改革の思想、パーリンの考察などをもとに検討を加え、当時の社会的な課題と向き合いながら思想を形成した論者の思想形成のあとをたどる。また、「みんなで決める政治のしくみ」、「みんなで決めることができないしくみ」を、同意・討議・信託という3つの観点から分析し考察を加えることとする。

第2章 生命の倫理

- 6 インフォームド・コンセント
- 7 出生前診断
- 8 脳死と臓器移植
- 9 安楽死と治療停止
- 10 「生命の質」をめぐる議論
- ※ 本単元は、バイオエシックスを取り上げる。生命の誕生から死に至るまで先端技術医療の開発と進展は新しい「生と死」の問題を生み出した。出生前診断、脳死と臓器移植、遺伝子操作、患者の自己決定権などを教材に取り上げる。その際、すべての人間の生命が等しい価値を持つとする生命の尊厳の立場と、人間の生命はその質がどのようなものであるかによって異なる価値を持つとする生命の質の立場をあわせて考察していく。

第3章 環境の倫理

- 11 環境の倫理－地球の有限性、世代間倫理、生物保護
- 12 水俣病の教訓
- 13 自然物も権利を持つか
- 14 未来世代に対する倫理
- 15 環境保全と社会的平等
- ※ 環境問題は、経済的、政治的な観点からの分析はすでに学んでいるので、本単元では、世代間倫理、環境正義、合意形成などの問題を取り上げる。これらの問題は、日常の経験だけでは判断がつかず、高度な知識を参照しなくてはならない問題でもある。したがって、個人の自己決定を集約して国家単位の決定とし、国家的決定を積み重ねて地球規模の決定に達するという、個人から全体へという意思決定の方式が上手く機能しない領域でもある。これらの問題を環境倫理の観点から考えてみる。

第4章 現代社会の特質

- 16 情報化社会とは何か
- 17 情報化社会とプライバシー
- 18 メディア・リテラシー①
- 19 メディア・リテラシー②
- 20 少子高齢社会①－若者が社会的弱者に転落する
- 21 少子高齢社会②－高齢者と家族・地域・国家
- ※ 情報化社会をケータイなどの視点から分析し、プライバシー、知的所有権、情報モラルなどの問題を取り上げる。あわせてメディア・リテラシーの育成という問題を取り上げ、具体的な作業活動などを取り入れてみる。少子高齢社会では、若者の課抱えている課題と高齢者の抱える課題を、それぞれの視点から分析し、最後にそれらを総合的にとらえることができるよう配慮したい。

第5章 異文化理解の課題

- 21 グローバリゼーションと国際交流
- 22 エスノセントリズム
- 23 多文化主義と共生
- ※ 本単元は、「国際社会に生きる」をテーマに、カナダなどの取り組みをしていく中で異なる文化や価値観をもった人々やマイノリティを理解し、ともに生きることの大切さを考えさせたい。レヴィ・ストロースの構造主義、各地の民族紛争、エスノセントリズム、多文化主義などを教材として取り上げたい。

第2編 「現代に生きる倫理」

第1章 人間としての自覚

- 24 ギリシア思想
- 25 キリスト教思想①
- 26 キリスト教思想②
- 27 イスラム思想①
- 28 イスラム思想②
- 29 仏教思想①
- 30 仏教思想②
- ※ ここでは、哲学や宗教における先哲の基本的な考え方が人間とは何かを問い、これに関する思索を深めているという点に着目させ、それぞれの思想が何を課題としていたかを考えさせたい。また、先の異文化理解に関わって、民族の宗教的基盤などにも触れていくこととする。

第2章 現代に生きる人間の倫理

- 31 合理的精神
- 32 実存主義
- 33 プラグマティズム
- 34 ヒューマニズム

- 35 日本の仏教思想
- 36 近世日本の思想
- 37 西洋思想の受容と展開
- 38 青年期の課題

※ 本単元では、「現代に生きる人間の倫理」を取り上げる。おもな内容としては、近代西洋の思想とその受容、日本人の宗教観、価値・規範の形成などの問題をあげることができるであろう。外国の思想の紹介だけでなく、それがどのようにしてこんにちの私たちの考え方を形成してきたのかを探究していきたい。最後に、これまでの倫理学習を踏まえ、あらためて個人と社会との関係をどのようにつくりあげていくべきかを青年期の課題として取り上げることとする。

(文責 吉田)